

「待てよ、フレッド。きみはミネソタ出身だったな？ ひよっとすると、これにはミネソタ州選手権がかかっているんじゃないかい、フレッド？」

「残念でした。こっちはクラブの選手権を狙ってるだけでね、負けてもともと」

「きみは負ける、負ける」ベアがいった。「だれでもそう、みんなそうだよ、なあ、ポール？ だれもポールには勝てやせんよ」

「それに答えると、奥床しさにもとることになる。記録はなによりも雄弁ですがね」ポールは自分の無敵さにちよっぴり陶醉してみる気になった。クロークの方角から聞こえる騒ぎから判断すると、今夜のゲームにはなにかとつびな趣向があるらしい。だが、それは気にならなかった。

「チェッカー・チャーリーのお通りい！ チェッカー・チャーリーに道をあけてください！」ベリンジャーの介添人たちが、ロビーからさげんだ。

娯楽室の中の群集が二つに分かれると、三人はベッドシートをかぶせたおとなの背丈ぐらいある箱を押しだしてきた。下についた足車がごろごろと鳴った。

「その中に人間がはいってるのか？」クローナーがいった。

「脳髄ですよ、脳髄」ベリンジャーが誇らしげにいった。「チェッカー・チャーリー、いまやあまたの新惑星の征服をめざす、チェッカーの世界チャンピオン」ベリンジャーはシートの端をつかんで、除幕式をおこなった——チャーリーは、前面のパネルにチェ

ッカー盤の描かれた、灰色のスチールの箱だった。チェッカーの駒が動くはずの柵目には、そのかわりにそれぞれ赤と緑の豆ランプが一個ずつ埋めこまれていた。

「やあ、はじめまして、チャーリー」ポールはほほえもうと努力しながらいった。なにが起こりつつあるかを知ったとき、かつとなって顔に血がのぼるのを感じたのだ。一瞬、ものもいわずに出ていこうかと思っただけだった。

ベアは、すでにボックスの裏蓋をとりはずしていた。「ほう、ほう、ふーん、なるほど」と彼はいった。「見たまえ、ほら、ほら、それであれがむこうへいって、それから——ははあ！ こりやすごい、メモリーまで持つてるんだな。きみたち、あのテープはそうじゃないのかい、ええ？ メモリーだろう？ メモリー・テープだろう？」

「そうです」ベリンジャーが自信なさそうに答えた。「だと思えます」

「きみがこれを作ったのか？」クローナーは信じられぬようにきいた。

「ちがいます」とベリンジャー。「父です。父の道楽で」

「ベリンジャー、ベリンジャー、ベリンジャー」ベアが眉をよせながらくりかえした。

「あれだよ——デイヴ・ベリンジャー。彼はデイヴの息子なんだ」クローナーがいった。

「おう！」ベアは賛嘆を新たにしてチェッカー・チャーリーをながめた。「そうだったのか、道理で、道理で、道理で」それを作ったフレッドの父親というのは、全国でも指折りのコンピューター技術者だった。